南半球便り（その８）：メルボルン訪問

3 月 15 日

（1）「死のロード」？

出張が続いています。2 月中旬のダーウィンに始まり、3 月は，ブリスベン，シドニー，メルボルンと続き，月末には西豪州のパースに赴く予定です。

阪神タイガース・ファンなら，夏の甲子園大会開催時期の「死のロード」を想起されるかも知れませんね。ホームグラウンドのキャンベラは盛夏を過ぎ，過ごしやすい秋の日差しと「そよ風の誘惑」（わかる人は同世代ですね！）に包まれているだけに，出張続きの身が恨めしく思えることもなくはありません。たまには，昔懐かしいオリビアを聞きながらジャスミン・ティーで癒やされたいものです。

（2）オーストラリアの広大さ

それにつけても，出張のたびに感じるのは，豪州大陸の圧倒的な広大さです。

アメリカ合衆国からアラスカを除いただけの広さを誇るのだから当然でしょうか。ただ，5 年間駐在したアメリカで広大さを感じるのは，中西部のトウモロコシ畑や，大平原，グランドキャニオンやネバダの砂漠を訪れた時でした。それに比べて豪州では，シドニーやメルボルンのような大都会でさえも，車で郊外に 20－30 分も走れば，人っ子一人見当たらない広大な牧場や原野が展開しています。とてつもないスケールを日常的に感じさせられるのです。

日本の 20 倍の国土も持ちながらも人口は 5 分の一。単純計算だと，人口密度は 100 分の一になります。日本人が 100 人住んでいる所に豪州では 1 人しか住んでいないことになります。道理で，人が少なく，スペースがふんだんに溢れているように感じられるのでしょう。

（3）水素式典

今回のメルボルン出張のきっかけは，ビクトリア州で日本企業連合軍（川崎重工，J パワー，岩谷産業，丸紅，住友商事等）によって進められている水素エネルギー・サプライチェーン（HESC）事業の式典に出席するためでした。

ラトローブ・バレーの褐炭田

メルボルンから約 160 キロも離れたところにあるラトローブ・バレーにある壮大な褐炭田を視察したほか，褐炭田に近接している石炭ガス化・水素製造施設周辺で立ち上げ記念式典が行われました。連邦政府からテイラーエネルギー大臣，チェスター退役軍人大臣という 2 名の閣僚が出席された上，ビクトリア州政府からはパラス財務大臣他が出席。本事業に寄せる連邦政府，州政府双方の強い期待がひしひしと感じられた式典でした。

石炭ガス化・水素製造施設

褐炭から取り出し，製造した水素をメルボルンの南東部 75 キロの場所に位置するヘイスティングスにトラックで輸送し，そこでマイナス 253 度で液化し，コンテナ船に積み込んで日本の神戸港まで運ぶ，という歴史的な大事業です。

水素製造開始を祝うテープカット

気候変動問題への対応から二酸化炭素の排出量の抑制が強く求められる中，石炭を活用しつつも二酸化炭素の排出量を抑え，水素を新たな電力源として活用しようという，時代の最先端を行く壮大なプロジェクトでもあります。日豪間の従来の補完的な貿易関係に，新たなフロンティアを広げていく大きな意義があります。

梶山経済産業大臣のテレビ会議での祝辞に続き，私からも，挨拶を申し上げました（原稿は，HP のスピーチ覧に掲載）。豪州側の祝辞の中で，「このような高度の技術と信頼を必要とするプロジェクトの相手は，日本しかいない。」との発言を聞いたときは，思わず深くうなずきました。

記念式典で挨拶

いずれ試験段階を越えて，商用化段階に入り，そして日豪経済関係の新しい黄金時代を切り拓いていくことを強く祈念して，視察を終えました。

（4）サー・ロッドとの懇談

メルボルンに赴いた機会を利用して，長らく豪日経済委員会の豪州側会長を務めてこられたロデリック・エディントン卿とも意見交換をしてきました。英国航空の CEO や JP モルガン銀行の豪州・NZ 会長を務めてこられた経歴からうかがえるように，長年のビジネストップの立場から日豪関係の現状や将来像について熱く語っていただいたのが，誠に印象的でした。

ロデリック・エディントン卿と

現在の両政府間の良好な協力関係を最大限に活用しつつ，どのようにして豪州における日本の存在感，日本における豪州の存在感を引き上げていくべきか，政治家同士の交流をどのように促進していくべきかなど，話題は尽きませんでした。

（5）日本企業幹部との意見交換

シドニーと並んで，メルボルンには主要企業の支店があります。トヨタ，三菱商事，三井物産といった大企業は，豪州本社をメルボルンに置いています。そこで，長年私と苦楽を共にしてきた島田メルボルン総領事の計らいにより，主要企業の代表の方々10 余名とじっくりと意見交換をさせていただきました。

「どうやって，豪州人に日本の高級車に乗ってもらうか。」，「水素自動車を普及させられるか。」，「日本のお茶やビールをいかにプロモートするか。」，「日本の住宅やビルの建設技術，さらには風呂の追い炊き機能やウォッシュレットをもっと普及させられないのか。」，「高級豪州ワインをもっと日本に輸出できないのか。」などなど，話題は実に多岐にわたりました。企業の方々からいくつもの貴重なご指摘やご要望をいただいたので，民・官の垣根を越えてオール・ジャパンで取り組んで参りたいと存じます。こういう前向きな話をしていると，出張の疲れなど吹き飛んでしまいます。

メルボルン商工会議所の幹部の方々と

山上信吾